

続生きて学ぶ

坂西志保

続生きて学ぶ

雷鳥社版

続 生きて学ぶ

著者略歴

東京都に生まる。

北米ホイートン大学、ミシガン大学大学院に学び、
1929 年、哲学博士号を授与さる。ヴァージニア州ホ
リンス大学で助教授をつとめ、のち合衆国立図書
館の東洋部に勤め、日本部長となる。第二次大戦に
より、交換船にて帰国。終戦後、参議院外務専門員
をつとめ、現在、国家公安委員。

(主著)『支那古代風景画論』『支那古代美術論』
(ロンドン刊行)、『現代詩歌集』3 卷、『狂言の研
究』など (ボストン刊行)、『地の塩』『生活の知
恵』『生きて学ぶ』(雷鳥社) など。

落丁・乱丁がありましたらお取り
かえいたします。

印刷 横山印刷株式会社
製本 清水製本所

東京都千代田区九段南二丁目一八
千代田会館内
郵便番号 一〇二番
電話 (二六二) 四八五九番
振替 東京九七〇八六番

発行所
雷鳥社

著作者 坂西志保
発行者 里田旬
印刷者 横山豊

昭和四十三年六月二十日 印刷
昭和四十三年六月三十日 発行

定価 五四〇円
千七〇円

日本図書館協会推薦図書

福原麟太郎著

日本の空の下

四六版 二四八ページ 価四五〇円 千七〇円

永い学生生活のおりおりに触れたでき事や日常の思惟、読書の楽しみ、文学論、交友等を精緻な筆でつづる。英学のゆたかな知識と多年の思索の集積から生まれた達意の文。著者のリベラルなものの見方、考え方で貫かれ、一編ずつになにかを教わり、心慰められ、希望をもたせられる滋味ゆたかな随筆集。

NHK読書委員会推薦図書

坂西志保著

生きて学ぶ

四六版 三三四ページ 価五六〇円 千九〇円

「学ぶということに終着駅はない」「つねに求め、問題を追究してゆくとところに人間の生きがいと幸福感がある」との人生観に立つ著者が、東西の幅広い知識と良識、強い信念から、おりおりのでき事にふれつつ、ものの見方、考え方、生き方を語る。現代の良識にあふれる好著。

日本図書館協会推薦図書

中川善之助・綾子 著

家族のゆがみ

四六版 二八八ページ 価五三〇円 千七〇円

毎日新聞社北米総局長

山内大介 著

アメリカ感傷批評

B六判 三〇二ページ 価四五〇円 千七〇円

家庭内の道義上の摩擦や法律上の紛争は、すべて家庭関係のゆがみから生ずる。朝日の身上相談で著者が扱った家事紛争を、結婚・離婚・扶養・相続等の諸問題に分け、親身な解答をこころみると共に、それを通して家族関係についての正しい考え方と人生の知恵、法律的なものを見方をじゅんじゅんと説く。

新聞記者として家族をつれての実生活に映ったアメリカ社会の諸様相を、感傷的でも観念的でもなく、むしろ感覚的に描写したスケッチ集。アメリカのお国ぶりにふれ、著者は「どこの国にも良い人間もいれば悪い人間もいる」との自明の理に達する。未知の事情も多く教えられ、面白く楽しい書である。

続生きて学ぶ 目次

I

共同の社会に生きる	10
生活の合理化とは	15
父親の余暇算出法	18
郵便配達の能率化	21
生活の均整	24
文化は生活の知恵である	29
自分の問題	38
旅の犯罪	42
酔っぱらい天国	45
デモの効用	48
親を守る保険	51
隣人不在の悲劇	54

クレーターさんのこと

人物判定の標準

正しい日本語を

読書について

読書の深層影響

図書館の有効的な使い方

知識の百貨店

頭脳の流出

Ⅱ

今後の教育に期待するもの

高校教師に望むこと

大学は無能力者の天国か

触覚型人間

自分の行動に責任を持って

フリーテン族の横行に思う

働くことと学ぶこと

少年犯罪の激増

姿勢

天才坊やと教育

萌えいづる力

家庭でなければできないしつけ

ほんとうのしあわせ

新しい人間関係を開拓しよう

若者に欠けている親への感謝

P T A の正常化を

大学の自治と学生運動



家庭と女性

考えさせる女教師論

就職戦線異常あり

女性の能力を生かす

女性の能力と老後

167 161 158 155 152

142 130 135 132 129 126 123 119 116 113

変わってゆく婦人欄

ある食事風景

デクの坊を育てる母親の愛

服装の約束

IV

納税者の素朴な願い

官制週刊誌

思いつきの政治

政治家の学歴

公務員に定年制を

売国者

出所進退

「二階にけりあげる」

素人のくちばし

公務員の汚職

消えぬ戦争の傷痕

215 212 209 206 203 200 197 194 190 187 184

180 177 174 171

混血児対策に本腰を

“死よ、奢るなかれ”

買いかぶられる日本

伸びる日本の産業

V

格言に挑戦する

プロテストの生活

棚

家庭菜園から

お酒―社交のさかな

ヴァジニア・ハム

雪まつりの思い出

あとがき

267

262

257

253

249

242

238

234

229

225

221

218

続
生
き
て
学
ぶ

I

共同の社会に生きる

「小さな親切」運動は、池に投じられた一つの石となって、そこに生じた波紋は大きくひろがっていった。毎日、日本の至るところで思いやりのある行為とことばが、たくさんの人たちを感激させ、生きがいを感じさせている。私たちは勇気をもって、朝家を出て、一生けんめい自分の力をフルに働かせ、仕事にいそしんでいる。しかし、生きるということはそう楽ではない。挫折し、回り道し、悪くすると行きづまってしまい、自分の努力が報いられることの少ないのがっかりする。そんな時であつたらうか、石川啄木は、

働けど働けど わがくらし

楽にならざりじっと手をみる

と歌っている。

彼はまた、

氣の変わる人につかえてつくづくと

わが世がいやになりけるかな

とも歌っている。

このような経験は、だれでも持っていることであろう。お先まっくらで、啄木でなくても生きているのがいやになる。昔の人は「とかく浮世は」とか「あすにはあすの風が吹く」と、あきらめていた。それも一つの方法で、そのような望ましくない心境に陥ったのはだれのせいでもないのだから、自分で一時も早くぬけ出す工夫をすべきである。だが、行きづまった人の頭は前向きに進むのでなく、堂々めぐりをはじめ、だんだん深刻になつて行くのがならわしである。針小棒大ということばがあるが、至極つまらない些細なことが、大変大きな、自分では乗りきれない障害のように思われて来るのである。これは人間の習性であり、また宿命でもある。

そのような場合に救いの道が一つある。それは他人の親切なのである。思い悩んで道をとぼとぼ歩いてきた人がある。だれかがそつと肩をたたいて、汗ににじんだハンカチを差し出した。ぽかんとして見知らぬ相手の顔を見ると「落とされたんです」といって、行きすぎてしまった。氣がついて相手のうしろ姿にありがとうといったが、それは多分きこえなかったであろう。しかし見知らぬ人が自分の存在を認めてくれたと氣がつくと、自分はまっすぐ立つて深呼吸をし、改め

て大地をしつかり踏みしめ、大きな重荷を肩からおろした人のように足どりも軽く街を行く大衆にまじって歩きだした。

この人は、後に有名な小説家になった有島武郎さんで、アメリカに留学し、将来の方向が定まらないまま、一時精神病院の看護夫になった。気の狂った患者の間にあつて、生きるとは何を意味するのか、ひどく迷った。それに外国で孤独感に襲われ、彼のいう“迷路”にはいつてしまい、そこからぬけ出すことができないでいた。天涯孤独というか、やるせない思いにかられていた際、見知らぬ人のゆきずりの親切に、ハッと自分の生きる意義を発見したのであつた。そして、自分は“生きる証^{あかし}を立てるため、祖国に帰る”と決意した。帰国した有島さんは、小説やドラマなどをたくさん発表した。

私が有島さんからこのお話をきいたのは、札幌のある青年会での集まりであつた。人間には“転期”があると切り出した有島さんは、外国でのこの経験を語られ、ついで札幌の近くの狩太にある広大な有島農場を小作人に解放する宣言をなされたのであつた。共同の社会に生きるためには愛と、その愛を具体的に実行に移さなければならない、と熱のこもった口調で有島さんは語り、私は深い感銘を受けたのである。

中谷宇吉郎博士といえ、だれでもすぐ“雪博士”というほど有名で、雪氷学界の最高権威として世界的に認められていた。博士の「雪は天から送られた手紙である」という言葉は、今日で